

武蔵野幕屋 日曜聖書講筵

七十路の峠にて

— 過去・現在・未来 —

— 詩篇第90篇 —

1974年2月3日

小池辰雄

人生70年 父の記憶 幼稚園時代 小学校時代 中学校時代 兄の政美 水戸高等学校時代
 大学入学以降 1940年9月22日武蔵野幕屋創立 婚約時代 1950年晩秋の阿蘇集会
 五人の恩人『眠られぬ夜のために』の「2月7日」の項 聖霊の力ある愛で突破 無能即全
 能という秘訣 七十路の峠を越して 曠野の旅を楽しく勇ましく進んで行きたい

【詩篇90篇】

神の人モーセの祈禱^{いのり}1 主よなんじは往古より世々われらの居所にてましませり^{すみか}2 山いまだ生りい^なです汝いまだ地と世界とをつくりたまわざりしとき^{とこしえ}

永遠よりとこしえまでなんじは神なり

3 なんじ人を塵にかえらしめて宣^{のたま}まわく人の子よなんじら帰れと4 なんじの目前には千年もすでにすぎる昨日のごとく^{めのみえ ちとせ きのう}また夜間のひとときにおなじ^{よのま}

5 なんじこれらを大水のごとく流れ去らしめたもう

かれらは一夜の寝りのごとく朝にはえいづる草のごとし^{あした}6 朝にはえいでてさかえ夕にはかられて枯るるなり^{ゆうべ}

7 われらはなんじの怒りによりて消えうせ

汝のいきどおりによりて怖ま^{おそ}どう

8 汝われらの不義をみまえに置き

われらの隠れたるつみを聖顔のひかりのなかにおきたまえり^{みかお}

9 われらのもろもろの日はなんじの怒によりて過ぎ去り

われらがすべての年のつくるは一息のごとし

10 われらが年をふる日は七十歳にすぎず^{ななそじ}あるいは壮やかにして八十歳にいたらん^{やそじ}

されどその誇るところはただ勤勞とかなしみとのみ

その去りゆくこと速かにしてわれらもまた飛び去れり^{すみや}

11 誰かなんじの怒のちからを知らんや
たれか汝をおそるる畏れにたくらべて
汝のいきどおりをしらんや

12 願くはわれらにおのが日をかぞうることをおしえて
智慧のこころを得しめたまえ

13 エホバよ帰れたまえ 斯ていくそのときを歴たもうや

ねがわくは汝のしもべらに係れるみこころを変えたまえ

14 ねがわくは朝にわれらを汝のあわれみにてあきたらしめ

世おわるまで喜びたのしませたまえ

15 汝がわれらを苦しめたまえるもろもろの日と

われらが禍害にかかれるもろもろの年とにたくらべて

我儕をたのしませたまえ

16 なんじの作為をなんじの僕等に

なんじの栄光をその子等にあらわしたまえ

17 斯てわれらの神エホバの佳美をわれらのうえにのぞましめ

われらの手のわざをわれらのうえに確からしめたまえ

願くはわれらの手のわざを確からしめたまえ

●人生70年

詩篇90篇を読みましたのは、ただここに

10 われらが年をふる日は七十歳にすぎず

あるいは壮やかにして八十歳にいたらん

という句があるので読んだわけですが、まあこの全体の詩は私の今日の気持ちにそう
しっくりしたものではありません。

「人生の旅路なかば」

とダンテがあゝの『神曲』の一番先に書いている「旅路なかば」というのはこの「七十歳」
からきている概念なんです。一般の人はそんなことは知らない。35歳です、即ち「七十歳」
の旅路なかば」とは。そしてせいぜいあと10年、80歳でもつてお終いと、聖書にはそう書
いてある。また別のところには、イザヤ書には「120歳」なんてことも、

「百歳もまだ若しとする」

なんて書いてありますが、まあ聖書の中にはいろいろあります。

今日はエレミヤをやめまして、とにかくこの2月7日で七十歳にさしかかりましたので、
その峠におけるところの所感を思い出づるままに述べさせていただきます。必ずしも信仰
的なことばかりではない。楽な気持ちでお聞きください。別な表題として私は今日は「過去・



現在・未来」と書いてみたんですが、それはちよつと堅すぎるから峠としまして、峠にさしかかって、来た方と行く末を眺めるというわけです。

●父の記憶

私の父政吉〔1856～1908〕は佐渡の人間、相川です。私はたった一遍しかまだ行ったことはないけれども。母光子〔1869～1957、八人姉妹の五女〕は信州松代、松井須磨子の生まれた所です。しかし、私は東京で、内村鑑三先生の誕生された弥生^{やよい}が丘ですね、奇しくも同じ丘で生まれたわけです。

私の記憶に残っているのは、父の記憶はもうほとんど断片的です。ここに写真があるけれども、大磯の海に連れていかれて、非常に大きな波が押し寄せてきて、旅館の庭先まできて砕けている、そういう光景を今でも覚えている。

それから、本郷弓町の家の一階から落ちて――手摺りによりかかって何かいたずらしたんでしょね――それでスッテンコロリンで鎖骨を折ってしまった。首を折らなくて助かったわけですが。そういうことがあったことをかすかに覚えています。私は時々、命の危なかったことがあるんです。

あと父の思い出としては、父が亡くなって棺桶の中に入っているその姿。そして鼻に何か灯心かなんかを入れて――昔の人はああいうことをするんでしょうかね――それからお葬式に母に抱かれて歩いた。人力車に乗って行った。何か土をかぶせたようなこと。まあそんなことがチラチラと思います。父の記憶というのは非常にそういった断片的なものです。私の5歳の時に亡くなりました。

明治37年（1904年）2月7日が私の誕生日ですけれども、翌日にもう日本の艦隊がひそかに始まって、9日に多分戦線布告ですから、日露戦争の勃発その前夜というわけです。1904年です。

●幼稚園時代

幼稚園時代のことをちよつと思ひ出すんですが、お茶の水の幼稚園で、藤棚の下で遊んでいた。なかなかいい藤棚でしたが。その幼稚園の先生は雨森先生という。弱虫のくせにちよつといたずらなところがあつたとみえて、何かいたずらをして、先生に叱られて、抱かれた時に先生の顔を引っかいてしまった。ちよつと傷ができたらしいんで、申し訳なかった。あの時の幼稚園の同期生に作曲家の諸井三郎、それから今の東京都知事美濃部亮吉なんてのが幼稚園の同期生です。お茶の水という正直、お茶の水にあった。今の順天堂病院のあの近所です。昔は、中学校と女学校もあの辺にあった。

その幼稚園時代は、私が千駄ヶ谷に住んでいた頃です。千駄ヶ谷時代にひとつどうしても忘れることのできない思い出は、夏に――あそこらはまだ田圃があつて、芹なんかつん



だり、小川が流れていた。石礮工場があつてトロッコに乗って遊んだり、その頃のこと
は非常によく覚えていて。2、3人の友達のいたずらつ子がそのトロッコに乗ってスーッ
と走る。そうすると、工場の職工に怒られるわけです。そうすると、大急ぎで逃げてしまつ
たりね（笑）。

ボンちゃんと通称していた親友がある。向かいに住んでいた男の子です。それとしよつ
ちゅう遊んでいた。昔はやっぱり男の子はピストルやサーベルが好きなんだよな。衣紋竹^{えもんだけ}
を腰にさげてサーベルのつもりで――お巡りさんが昔はサーベルを下げていたから――そ
んなのを下げて遊んでいたわけです。

大通りに出て行つた。夏の初夏の頃です。まだ学校は一学期の終わりに近い頃――私の
兄貴が高等師範の附属の中学生だった――大八車の荷車が、これは米俵を満載していた――
―それも覚えています――これを馬が引いている。ところが、そこにカブトムシが歩いて
いるのを見つけた。そしたら、ボンちゃんがそれを追つかけて行つた。カブトムシがそ
の車輪の中に入つて行つた。それを追つかけて行つたものだから、うっかりこの車輪の間
に入つて、後車輪にぶつかつて――これは大変な重量ですから――これに首を挟まれた。
即死ですよ。今でも、その首から血が出て、その哀惨^{あいさん}が目には浮かんでたまらないです。もし、
私が先にこれを追いかけて行つたら、私はもうその時にお終ひ。

「人その友のために生命を棄つる、これより大いなる愛はなし」

という。だから、ボンちゃんがいれば私の犠牲になつたということも、ある角度からは言
えるわけです。それでも、私も呆然としてしまつて、馬方もびっくりしてしまつてね、
そしたらちようどそこに、私の一番上の兄貴の政美が学校からの帰りにさしかかつた。そ
して兄貴もびっくりしてしまつた。それで兄貴はすぐそのボンちゃんを担いで、交番に行
つて、あと始末をしてくれたわけです。

それから私はなんだか寂しくて悲しくてしうがなかつた。その日を何月何日だか忘れ
てしまつて誠に申し訳けないんですが。忘れたといつても、子供だから別に覚えようともし
なかつたんでしうけれども。それが幼年時代の忘れることのできない思い出なんです。
その頃になると、私は時々瞑目しますけれども。

それから、幼稚園にお弁当を持つて行つたそのお弁当の中味も覚えています。鶯豆^{うぐいすまめ}が一
番好きで（笑）、鶯豆が入っていると喜んでしまつた。

それから、その千駄ヶ谷で母は一人でもつて五人の子供たちを育てたくれたわけです。
父が亡くなりましたから千駄ヶ谷で、5歳の時に。兄政美〔1895～1921、9歳上〕と二番
目の兄龍二〔1898～1933、6歳上〕と姉富士子〔1899～1949、5歳上〕と――三番目の兄
三郎〔1901～1901、3歳上〕は乳飲み子の時に乳母の乳が悪くて亡くなつてしまつた――
それから妹の愛子〔1907～1914、3歳下〕と、この五人ですね。母はお茶の水の女学校の
国語や数学の先生をして20年間お勤めをしてくれたわけです。いろいろ、5人を育てるの



は大変なことでした。私の一番深い恩はやはり母です。

●小学校時代

今度は、小石川の林町という所へ移って行つた。林町が私のほとんど小学校時代です。そこから高等師範の附属まで歩いて25分から30分かかった。時にはいじわるな奴がいて、私をいじめようとする。私はクラスで下から2番目か3番目の小さい弱虫ですから。そうすると、待ち伏せしているんだな、帰りに。私は、

「ああ、あつちで待ち伏せしているな」

と思うと、別な路から帰る。ダンテではないが、「別な路を通って行く」なんてこともありました。氷川神社ひかわというのがあつて、非常に石段のたくさんある神社が私の通り路でした。今はどうなっているかな。

小学校時代は、

「ハト・タコ・コマ・ハト・マメ」

というやつを始めつから教わった。始めはカタカナでそれからひらがなでしたね、我々の頃は。小学校のああいふ教科書は全部とっておけばよかったと思うが、みんなどうかなつてしまった。1・2年、3・4年、5・6年と私は一部・二部・三部とありまして、私は二部なんです。二部授業というのは、1・2年生は同じ部屋の中にいる。3・4年生が同じ部屋。5・6年生が同じ部屋。1・2年生は、1年生が24人、男12人と女12人。24人と24人で48人。その1年と2年が一教場に入つて、先生は一人で、こつちで算術をやらして、あつちは読み方をやっている。それを半分30分ずつ適当に、先生はあつちへ行ったりこつちへ来たりして、算術は静かに計算しているし、こつちでは読み書きをやっている。だから、上の生徒はどんなことを教わっているか時々わかるわけです。誰ができるかできないかなんてのも(笑)、お互いに分かつてしまう。時間からいうと、本当は半分というわけだな。6年間を3年間でやったといえるかなんか知らんけれども、そのような授業を受けた。そのかわり月謝は安かった。そして、男の子と女の子と並んでずっと坐らせられた。私の隣は牧島という子でしたけれども、もう亡くなつてしまつたらしい。

担任の先生は、1・2年のときは相島という。これはNHKに相島何とかというのが時々科学の方に出てくるね、あれはあの息子なんです。相島亀三郎といつて、「アイガメ、アイガメ」なんて言つてたけれども。3・4年の時は加藤先生、5・6年の時はあしだ芦田先生。いろいろ先生方は特色があつて面白かつた。特に5・6年の芦田先生は非常に印象深い方でした。国語の先生でした。

私はちよつといたずらつ子でね、また弱虫だもんですから、唱歌の試験のときに一人ひとり立つて歌わせられるでしょ。そうすると、震えてしまつてね、よく歌えない。唱歌は、甲・乙・丙の丙なんかもらつてしまった。実力はあるはずなんだけれども、試験となるとダメ



なんです。それくらい気が弱い。そのくせ、いたずら書きなんかしていると先生に怒られる。習字の時も真面目に書かないで、何かマンガか何か書いたかしらんけれども、見つかってしまつて、そしてそれを持ちながらクラスの中を歩きまわされた（笑）。そういうことも覚えています。しかし、楽しかったですね。

正月になると、風あげでもって夢中になったり、コマをまわしたり、大変、東京はまだ田園情緒の豊かな東京でした。その点は今の小さい人たちはお気の毒だと思うけれども。田舎にいた方がいいですよ。

勉強も余りしないんだ。5年あたりから本式に始まつた。入学試験があるからね。放課後も学校で補習授業なんか受けたりした。小学校の5年の始め、本郷西片町10番地口の2号とかいう所に移つた。この西片町に移りましたら、春の遠足に行つたわけです。ところが、私は扁桃腺が生まれつき腫れている――生まれつきだか何だか知らんけれども――

「扁桃腺が腫れているから余り歩いてはうまくない」

と、母に非常に止められたけれども、どうしても――どうせまた泣いたんでしょね――押し切つて出掛けた。中野から井の頭まで歩いた。あの頃は終点が中野ですから。井の頭公園に遠足するということで、それが大変な距離です。これが私にはちよつと荷がかちすぎた。帰つて来たもうヘトヘトで、すぐ急性腎臓炎にかかつてしまった。扁桃腺が腫れていたから。翌朝になつたら顔がむくんでしまつてゐる。これが急性腎臓炎。お母さんの言うことをきかなかつたものだから、とんでもないことになった。

一方、自分の妹の愛子（1907～1914）、これは三つ下ですけれども、これが猩紅熱にかかつてしまった。これが入院。私が腎臓炎で寝てゐるうちに、愛子は他界してしまつた。私には、また悲しむというので、しばらく知らせなかつた。母はまあ大変でしたよ、正直。

腎臓炎というのは痛くもかゆくもないんだな。ただ寝てゐるだけです。そして、牛乳とスイカとバナナ、そういうものはいいので、醤油の類はいけない。塩もあまりよくない。もうバナナは飽きてしまつた。牛乳は飽きませんでしたけれども。

その病中に、私のちょうど小学校の5年の時に、この政美兄貴から英語を教わつた。大変英語がおもしろくて、一学期はとうとう休んでしまつたけれども、二学期出てみたら私の方が学校よりも進んでゐるんだよね、英語が。だから、英語が一番できる。それは兄貴のお陰だったんですけれども。「英語の先生」なんていう^{あだな}綽名をつけられてしまつた。

高等師範の中学の入学試験の、あのときの気分は非常によく覚えてゐます。数学を1題間違えてしまつた。とにかく6人に1人の、随分強い競争率ですから、180人の受験生で30人しかとらない。昔は1クラス30人なんです。一部から全部入つてしまふ。甲組と乙組があつて、30人と30人。甲組は全部一部というわけではないけれども、それは中へ入つてばらまくんですけれども。とにかく、1クラス30人です。それで、1題間違つたからこれはもういかに。私は悄気かえつて、もう発表を見に行くのが嫌になつてしまつた。でも、「まあ、



行け行け」というわけで、恐る恐る行つた。そうすると、テツカンという^{あだな}綽名の小使いさんが——頭がツルツルなんです——それが梯子に乗つて巻紙をずうつと校舎の壁に段々くり広げた。私は受験番号60番でね、そうすると繰り広げているうちに裏側から見えるわけだな、巻紙だから。そしたら、

「ああ60番があつた！」

というわけで、今でも明らかに覚えています。番号と名前が出るわけです。その時のうれしきというものは何とも言えなかったですね。その発表が2回あるんです、前の日と後の日と。前の日、始めの日は国語と数学と習字。習字の試験があつたんだよ、毛筆で。「りんきおうへん」という題。「臨機應變」と書く。書けましたけれども。小学校でもこういう熟語を知っているんだからね。それで、前の日がそれで通つたら、

「小池君はもう二日目は大丈夫だよ」

なんて言われましたけれども。英語の試験でしたから。英語はリーディングもディクテーションもある。それから英文和訳、和文英訳。なかなかこったもんですよ、中学の入学試験に。それでとにかくパスしたら、兄貴が非常に喜んでね、

「今日は活動写真を見に行こう」

と、浅草の活動写真館に行った。電気館と帝国館という所に。女探偵ものと、飛行機で国境を逃げていくようなものを、断片的に覚えていますが。とにかく一回に活動写真を二つ見たというわけで、私は大変な歓びでした（笑）。まあ私の兄貴はほとんど父代わりですからね。

● 中学校時代

中学時代は、西片町で妹が亡くなったり私が病氣したもんですから、すぐ引越しまして、今度は小石川の同心町、今の伝通院から向こうへ行つた所、竹早とか同心町に。この同心町が私の中学時代。こないだちよつとあつちの方へ通つたら、全然跡形がわからんです。すっかりあそこは焼けたもんですからね。同心町時代は、もちろん借家ですから、門なんかない、いきなり玄關の家。それで二階に兄貴と二人で机を並べて勉強していたわけです。

私の兄貴はその頃、一高ですね。一高から東大〔政治学科〕ですけれども。その一高時代に内村鑑三先生の大手町の集会に出掛けて行つた。始めは、何か友人が聖公会で築地の三一教会とか何とかいう所に行つていた。ところが、どうも兄貴はその教会があまり面白くないんだな。今どこに置いたか知りませんが、三一教会のパンフレットがある。それに一々疑問を、

「いぢうとろはどろめ…？」

というように、ちゃんと短冊をそこに貼り付けてある。そういう宗教的な疑問をたぐさんそこに覚え書きしてあるのがあった。それから内村先生の所に出掛けて行つて、こ



ここで兄貴もはっきり無教会の信仰というようなことで、一高から東大にかけてずっと大手町の集会です。

それから日曜の集会のあとは、兄貴は散歩するのが好きでね、市の郊外へ五万分の一の地図をもつて自分一人で散歩していた。その散歩した跡がずっと赤線で引つ張つてある地図がありましたよ。

中学時代は私は、夏はOBが房州の富浦でもつて二週間の水泳の授業をしてくれた。非常に厳密によく教えてくれて、そして試験をして6級から1級まで段々上がっていくわけです。私は5年間毎夏行きまして、教わつてとうとう最後に1級になった。1級になったのは3、4人しかいませんけれども。全部が全部、しょっちゅう毎夏行くわけではないので、私は行つたんです。水泳部の記録係にいつぱん4年の時にされて、記録したのがあるわけなんだけれども、どこへいつてしまったか。それがなかなか名文なんだよ、今よりか。

中学時代は、国語・漢文の先生が始め森本カクゾウという先生が担任で、それから石黒ロヘイさん、これは相当有名な人ですが、英語の先生で、これが担任。やはり石黒先生は非常に情熱を傾けて授業をしてくれた。それから、西洋史の斎藤ヒロセこれがなかなか面白くて、東洋史も教えてくれましたが、この斎藤先生の授業は終わるのが惜しくて、講談みたいなものだから。非常に楽しかった。

英語と数学が好きだったものですから、さて文科に行こうか理科に行こうかと迷つてしまつて、自分で一人トランプして、今度出たらこっちだなんて(笑)――まあそれは半分冗談ですけども――そんなことをやってみたり。しかし、私は工科に行きたかつたんです、割合に製図なんか好きでね。ちよつと考えられないでしょ。潜水艦の内部なんかの図を非常に厳密に書いたことがある。ところが、

「身体があまり丈夫でないから工科の方はさて身体がもつか」

なんてことを、お母さんに心配されてね。それでは、英語が好きだから文科に行こうかと、英文科に入ろうと思った。兄貴は英語で、二番目の兄貴はフランス語で、じゃあ私はドイツ語と(笑)いうことになつてしまつて、独文に入った。まあ独文に入つたことは別に後悔はしていませんけれども。

始め一高は落ちてしまつて――それで私は一浪ですよ――しかし、その一浪で一年間勉強したので非常に実力がついた。もう自身満々です、その時は。それで、また一高を受けたかったです、正直。

●兄の政美

ところが、兄貴が1921年9月22日に北京で亡くなった。これは大蔵省の役人だったけれどもロンドンに行くことになつていたんです、本当は。非常に英語が達者なもんですから、外交官になるかと思われたらしいけれども。ところが――こんなことは言いたくな



いけれども――ある上役の人がすり替えてしまったんだよな、兄貴と別な人を。それで、北京に回された。これが運のつきですよ。

藤井先生の土曜集會に兄貴は出掛けて行つた。内村先生の日曜聖書講筵と藤井先生の土曜集會に。藤井先生は何か祈祷会みたいなものをやっていらつしやつたらしい。内村先生のお手伝いして柏木に居られた。そんな関係で藤井先生とは仲がいい。仲がいいというか、可愛がられたので、「美しき印象を残した人々」の中に藤井先生が書いてくださいましたが、兄貴が藤井先生に、

「北京に行つてよろしいか？」

と聞いたら、藤井先生は

「まあいいだろう」

てなこと。あとで藤井先生が非常にそのことを、

「僕があんなことを言つて、いいと言つたのが「わるかつたのかも」……」

なんて仰つたけれども、それは先生の責任でも何でもない。

それで1920年の秋に「北京へ」行つて、1921年の夏、9月に仆れてしまった。約1年間。まあ兄貴の自慢をしたつてしようがないけれども、上役の人が、

「小池君は1年間に普通の人が6年間かかつてやるような仕事をやってしまった。

非常な読書力だ」

と。何か支那の20年間の銀行史なんていう大部なものを書いたらしい。もの凄くエネルギーで、兄貴は徹夜しても平気な顔していますからね。

この兄貴が――もう私は同心町の時代からはつきり覚えていられるけれども――内村先生の集會に行きだしてからはずきりとその生活が著しく、兄貴のその生まれつきの強さが本當に信仰的な強さに切り替わる。

なかなか兄貴は太っ腹のまた男らしいやつですからね、喧嘩も強いんですよ、ガキ大将でね。小学校のときも、他の小学校の群とこっちの小学校の群と、こっちのガキ大将となつて喧嘩して、お父さんに非常に叱られたようなことがあつたらしい。どういう時だか知らんけれども、

「お前は家に入るな！」

と言われたら、外に立ちすくんでちつとも入つてこない。それでとうとう夜中になつても入つてこないものだから、仕方がないからお父さんとお母さんは負けてしまったなんてなわけです。非常に性格がはつきりしています。しかし、私は兄には非常に可愛がられた。

兄貴は、夜の9時になると必ず雨戸を開いて、そして手摺りに寄り掛かつて祈っていました。それを欠かしたことがない。聖書は机の上に開いたまま、読んだところまで開いたまま、半年に聖書を創世記から黙示録まで必ず読んでいく。これが何回目だなんていうことをやっていた。とにかく、英語を読むことは日本語と同じくらい速いし、日本語と同じくらい書



けるし、しゃべるし、というような、私よりか遙かに優秀なんです。学校の成績も全甲ですからね。民法でも片山先生に98点をもらったとかいう、「未だかつてない点だ」とか言われてましたけれども。高等文官試験「1894年から1948年まで日本で実施された高級官僚の採用試験」を大学の2年の時にパスしてしまっただけ、2年の1学期で3年の勉強を全部してしまっただけです。まあ兄貴が生きていたら、兄貴よりか下の奴が大蔵大臣になりましたから。そういう兄貴が仆れて、それで私はやつと、

「一粒の麦地に落ちて」

というわけで、この信仰の世界に入った。そのことはちよいちよいお話したから、詳しく申しませんが、

兄貴の死ぬ時は、ちょっと前にキリストの幻を見て、

「イエスさまが迎えに来られた。お母さん、お先に失礼します」

と言ったそうです。まあ27歳「数え年。満26歳2月」ですから、これから本当に兄貴はやつてもらわなければならないと、母はせつかくそこまで育て上げた。これが仆れたものですから、母としては今までの過労と心痛が一度にきて、黄海の上で失明してしまっただけ。まあ二番目の兄貴「龍二」が一緒について行っただけですけれども。下関、門司ですぐ手術すれば、あるいは助かったか何か知れませんが、東京まで来てしまっただけ、東京に名医がいるというのでやつたけれども、それはもう既に時遅しでした。母は50歳の時に失明してまっただけ、それから88歳まで38年間。

まあそんなことで、私は今度は二番目の兄の世話になった。まあ話が前後してゴタゴタしてしまっただけ。

●水戸高等学校時代

私は水戸の高等学校に入っただけでも、実は実力があつたものだから、成績からいうと一高にももちろん入れた。だから、^{おとう}快々として楽しまずというわけです。叔父「武田」さんの世話になってるから一高を落ちたら悪いですからね。水戸でもって急性腸カタルにかかって、これがまた夏ですね、6月頃のこと、ちょうど梅雨どき。衛生をあまり考えなかったから、自分が悪いんですけれども。寮の（食事の）「ブタ（トンカツ）」がちょっと当たったわけです。それだって、当たったって本当は大したことにはないはずなんですけれども、普段の間食や何かで少し胃が弱っていたんでしょうね。それで水戸の病院に入院。これはもうほとんど危なかった。その時に叔母さんが東京からわざわざいらっしやって——私の母の二番目の妹「吉原」ですけれども——非常に懇ろに看護してくれました。そして、治りがけの重湯からお粥に変えていくところの、これは非常に大事なときなんです。あそこでやりそこなうと、またいけないんです。いわゆるいい加減な看護婦に任せておいたのではということ、叔母さんが自分でもって全部それをやってくれた。私はそのご恩も忘れることはできません。



ところが、体重が昔でいうと9貫〔33.75kg、1貫＝3.75kg〕なんだよな。骨皮筋衛門、少し歩くときたびれてしまつてね。治つたつて、34キロか、あれでもつて肺をやられたら、もうお終いでしたよね。それで〔東京に〕帰ってきて、休学ですよ。少し歩いてもくたびれてしまう。少しよくなつて、内村鑑三先生の集会に、兄貴が亡くなつたあとの兄貴の本棚から『宗教と現世』という本を開いてね。それから、内村先生の集会に出掛けて行つたのが始めです。水戸から帰つてくるたびに大手町の集会に行つたわけです。

●大学入学以降

それから大学〔東大〕にきまして――これは忘れもしない1923年の3月7日――藤井先生の所に行つた。藤井先生は兄貴の遺稿集に――ゴードーの『キリストの復活』という本の訳です――それを出版してくださつた時に、私は校正なんかのお手伝いをした。そして今度は、藤井先生の家庭集会に――寺小屋集会だな――そこへご厄介に行つたわけです。その3月7日の最初の日には雪が降つていた。そして、先生は最初の日には私に『聖書の結婚観』という本をくださいました。今でも先生の文字まで覚えています。それから私は正直一回も休まずに先生の死に至るまでこの集会に出席いたしました。ある夏は誰も行かないのに、私は毎日曜に行つて先生と一対一でもつてお話を――集会ではないけれども――承つた。まあ先生は迷惑だつたか何かしれないけれども。そんなことで、1930年7月14日に先生が亡くなるまで。その6月30日が最後の集会でね、あそこは1年間で黙示録を先生はやつて、ちょうど黙示録が終わつて、その集会がおしまいになつて、これで解散となる。夏休み前に先生はいつも解散する。そして秋から新しく申し込むんです。マネリズムはいかんということ。

その黙示録の講義を、この順子〔後に妻となる伊藤順子〕がメモをとつておいてくれたので、それを土台にして私は――自分はまだノートなんてとらないものですから――そして今度は、藤井全集が出る前に、ちょうど1か月で毎晩1講ずつ書いていった。あれも不思議だつたね本当に、毎晩ちようど1か月かけて。あれは実は藤井先生と私との合作なんでね、先生の言わないことも書いてある。〔註：第1講（1929年9月15日）と第30講（1930年6月29日）。『藤井武全集第5巻 黙示録講義（筆記）』に掲載〕

私の恩師としては、藤井先生は何といつても恩師です。種を蒔いてくれたのは何といつても兄貴ですけれども、この兄貴と内村鑑三先生、藤井武先生、それから藤井先生が亡くなつて、塚本虎二先生。

塚本先生の所には、始めは3年間、私は藤井先生が亡くなつてから行かなかつた。『三年喪に服す』というわけでもなかつたけれども、ちようど3年間行かなかつた。ある人を紹介しに、丸の内に掛け行つて、それで

「先生、この人を連れて参りました。私もしばらく或る時までご厄介になります」



といって、それでまあご厄介になって、司会なんかさせられたり、ヘブライ語のクラスを持たされたり、『旧約知識』誌〔塚本虎二主筆〕の同人になったりしたわけです。

●1940年9月22日武蔵野幕屋創立

1940年の兄貴の命日〔9月22日〕がちょうど日曜日でしたから――まあ母もちよつと丸の内に出席するのはもうかなり不自由でしたから、では母のために集会を家で開こうかなと、一番身近な気持はそうだった――それで1940年の9月から今日に至るまでとにかくこの集会を続けて来たというわけです。その集会を始めた頃は、まだ私は無教会の流れにいた無教会信仰時代です。

無教会の信仰はもちろん結構なんです。筋としては正しいし立派なんです。けれども、どうしてもそれが人間の側の立派さとか、あるいは「自分の信仰」とかいう角度がややもすると「強くなる」、ということまでへたすると主義的になる。「無教会主義」だなんてなことですね。知らない間に枠ならざる枠ができています。

人間のすることは何だつてどうせ相対的なものですから、どれにだってみな欠陥があるし、「これは絶対」なんていうものはひとつもない。けれども、いいんだけれども、どの先生も一流の先生ですから、内村、藤井、塚本なんてのは。どの集会に出ても私は本当に満たされて帰ってきました。いろいろ学んだり、それから心の満たされはあつたけれども、何か本当の自信というか、力というかがないんだね。自分が信仰的に進歩していることもわかる。それで私はどうもこれは祈りの世界だなということに気がついた。

●婚約時代

結婚の話はしなかつたけれども、藤井先生の所にこの順子が、まあ（若い女性は）一人しかないわけですから、相手としてはね。だから、必然結婚と言っている（笑）。

私は婚約してから、これだけのもの〔13冊の手書き原稿〕を書いたんです。聖書の研究でも何でもありませんが。〔婚約時代の1年間に〕毎月書いて、彼女に送っていた。創刊の『こひつじ』という雑誌です。これはみな四百字の原稿用紙です。この一番、創刊号に「祈り」と書いてある。「祈り以前の問題」とかいつてね。それから「祈りの哲学」といつて。なかなかフィロゾフィッシュ〔哲学的〕なんだな。「祈り以前の問題云々」とかいつてね、自分が一番問題にしたのはやはりこの祈りのことだなということに気がついたわけです。〔註…『こひつじ』誌は手書き原稿のままの雑誌（未発表、小池辰雄文庫に収録）。第1号（1932年11月）〜13号（1933年11月）を婚約1年間に編み、1933年12月に伊藤順子と結婚。当時、辰雄は29歳、順子は22歳〕

●1950年晩秋の阿蘇集會

それから『旧約知識』誌に私が〔詩篇を〕書いていた。そうしたら、『旧約知識』を読んで、



手島（郁郎）君が非常に感激し感動しまして、

「私は『旧約知識』では先生の詩篇が一番とにかく心にうったえる」

てなことを手紙で言ってきました。大体、九州の人というのは、礼儀は正しいんだね。たとえば写真までちゃんと入っている。ちよつと異様な顔をしているけれども。内村先生が『求安録』か何かにお書きになったその家がある。その家の前で撮ったという記念の写真みたいなものを送ってくれました。

それで出掛けて行つたのが、多分いきなり行つたのがあの阿蘇の集会だった。1950年11月の3日から5日。晩秋の垂玉〔阿蘇山麓の垂玉温泉〕という、断崖にいろいろ紅葉して本当に錦のようにきれいでした。その集会で

「お父さま！」

とやっているわけだな。これにはどうも驚いた。とにかく、もう棄身の叫びでやっているから。それで、

「いやしかし、これはとにかく祈りの本当の角度だな」

ということを私はすぐ――私は割合に魂が弾力性があるからね――それで私も棄身の気持で祈ってしまったら――なにも手島君に教わつたのでも何でもないですよ――異言になつてしまった。そしたら、

「先生、それは本当の異言ですよ」

なんて横から「手島君が言う」。そうかと思うと、女の人たちが靈歌を歌いだしてね、みんな目をつぶっているけれども、自然にリズムをなしている。手島君はタクトをとっている。

「ちよつと見てください」

なんて言つてね（笑）。あれは録音しておけばよかったと思うくらいにきれいだったね、その後どれくらいあるか知らんけれども。靈的な現象というものは、或る時にグーッとくるんですよ。それがしょつちゅうあるわけではない。それから、靈的狀態の悪いのがみんなそれが出てくるんだよね、舌をペロペロ出したり。

「あれはちよつと蛇の靈がついてます」

なんていつてね（笑）。そうすると、手島君が行つて按手して、

「聖名によつて命ず、いでよ！」

てなことで出してしまふ。するとガタンと倒れて、そして治つてしまふ。どこかへ靈を出してしまふ。

「なるほど聖書に書いてある通りのことをやっているんだな」

と思つて、私はびつくりした。

手島君はいろんなこと〔起業〕をやつて、とうとうスカラカンになつてしまつて、もう全部失敗したのだから、山に籠もつて祈つたわけです。それから彼もこの聖靈を受けて、それで始まつたわけです。異言の体験を書いた「異言論」それから「按手論」、これは手島



君でなければ、無教会の人には書けません。

まあしかし、人間的にはちよつとあの人とはやりにくいからね、僕は。彼にはなかなかいろいろな面があるから、一緒にやることは或る時から止めた。個人的な交わりはしてましたけれども、交わりというのは雑誌の交換のこと。

●五人の恩人

そんなことで、内村先生のあの預言的な信仰の、預言者的な人物に直かにぶつかったこと。また、藤井先生は私に一番いろんな意味で近い。詩人的であるし、それから非常にものの考え方、掴み方が非常に似ている。

だから、私は自分で何か感じて行くでしょ。先生はその時に自分と同じようなことを言われるので、やれやれなんて思うことが集会でよくあった。先生の話は、ごく寺小屋式に坐つて、14〜15人ですから、お話で別にそうまとまっているほどのことでもないけれども。しかし、いつもやつぱり魂にしみ入るようなことでした。「恩寵の跡」〔著作集第9巻『感想と紀行』／第五章「人物回想」／二、恩寵の跡（1931年12月13日）に所載〕に詳しく書いてありますから、あれを読んでくださったらいい。

午後には、カント、ダンテ、ミルトン、ヘブライ語、ギリシア語なんてなことをやって、もう大体、星をいただく頃に帰る。奥さんがいらつしやらなかつたから、先生も我々が帰る時には――我々といつても3、4人ですけれども――何となくさびしいお気持は今お察しするわけです。〔註：藤井武（1888/1〜1930/7/14）は1908年西永喬子^{のぶこ}と結婚（武は21歳、喬子は15歳）。喬子は三男二女を遺して1922/10/1に病没（29歳）〕

まあ先生は正直、その日暮らしですよ。私は時々、晩食にお子さんたちと先生と囲んでね、そうするとパンなんかもお砂糖をつけてパンを食べたりしたことがある。バターもジャムも儉約しているわけです。先生が亡くなった時には財布の中はカラッポ、貯金も借金もなし。これは矢内原先生（矢内原忠雄、藤井の義弟）から聞きました。藤井全集が出て、お子さんたちのその後の生活が成り立ったんです。そういう信頼そのものの生活を先生はしておられた。実存は何といつても素晴らしい。

私の信仰でそれぞれ先生方は恩人なんです、すべて。この5人の恩人。藤井先生は特に恩師ですけれども。手島君は、私の一番大事な最後の仕上げのところのきつかけをつくってくれた。御霊の世界の。それは私ははつきりしている。

この集会を始めて10年位たつてから、1949年くらいからこの集会の調子が変わってきた。もの凄く私は燃えていましたから、波風立てて行くものだから、

「もうやり切れない。とてもついて行けない」

なんて言つて出て行つた奴がある。まあいろいろでした。それで、あなた方の中で特にガリラヤの諸君（壮年男子組）は、その波風と一緒に乗り切つてここまで来てくださったわけ



です。ガリラヤの諸君には私は本当に感謝しています。今、ヨルダン〔青年男子組〕、サフラン〔女子組〕のご連中、特にヨルダンの連中は非常にこれから大いにやってもらいたいわけですが。何といってもまだ若いから、もう達したような気持ちになったらダメだよ(笑)。まあそういうことでございます、大体の思い出と申しますと。

●『眠られぬ夜のために』の「2月7日」の項

ヒルティが『眠られぬ夜のために』〔第一部〕のちようど「2月7日」のところにこういうことを書いています。非常に私のためにヒルティさんはこの「2月7日」を書いてくれたかと思うくらいのことです。ちよつとドイツ語をご参考に読んでみます。それからあとで自分の訳を読みます。

7. Februar.

Ein Schriftsteller sagt mit Recht, es komme eigentlich bloß darauf an, auf dem rechten Wege zu sein; alles andere gebe sich dann von selbst.

Man kann auch sagen: Es ist bloß wichtig, den Geist zu bekommen in sein Leben hinein, welchen das Evangelium den heiligen nennt; derselbe tut dann alles weitere.

So kann man auch noch weiter sagen: Machte zeitweise alle religiösen Bücher zu außer der Bibel, und selbst in dieser laß alles, außer den Worten und Taten Christi. Das andere ist zur Seligkeit nicht nötig, kann aber zeitweise wieder eine brauchbare Unterstützung, oder Anregung sein.

Es ist merkwürdig, wie das Evangelium auf arbeitende Leute allein vollkommen wirkt. Einem solchen ist es eine beständige Erquickung auf seinem Wege; ein Müßiggänger, auch ein geistlicher, hingegen muß noch etwas dazu haben, fortwährende Gemeinschaft, Feste, äußere Kirchlichkeit aller Art, die der andere zur Not ganz entbehren kann.

„Gnaden wahl.

Der du mich zu deinem Werke

Auserwählt von Ewigkeit,

Zur Erkenntnis gib die Stärfé;

Mache tätig und bereit.

Was du forderst, lehre wagen;

Was du tust, tu' ganz und groß;

Nur im Glauben kann man tragen Ein so schönes, schweres Los.“

(Carl Hilty Für schlaflose Nächte —)

「2月7日

正道にあるいのみが、本来的に問題で、その他のすべてはねのちから生じてくる



とある著述家が言っているのは正当である。

またこう言つこともできる。すなわち、福音書が聖霊と名づける霊を自分の生活に獲得することのみが重要である。そうすれば、この霊がそれからさきのいっさいをなす、と。

しからばさらにまた進んでこう言つことができる。聖書のほか、いっさいの宗教書をしばらく閉じよ。しかもこの聖書においてすらも、キリストの言行のほか、いっさいを捨ておけ。その他のものは恵みに必要でない。ときには有用な援助か、刺激となることはあるが。

福音が働くひとびとにのみいかに全的（十全）に作用するものであるかは、注目に価することである。働くひとにとって、それは自分の道における不断の清涼剤である。ところが閑人は、聖職者もまたそうであるが、たえずおこなわれる会合とか、祭儀とか、さまざまな種類の外的教会行事などのよい必要なことが必要になってくる。しかしそのようなものは、働くひとにはさしあたりまったく不要である。

恵みの選び

あなたよ、みわざのためにわたしを

永遠（永劫）より選んでくださった者よ、

その確認のため、力を与えてください。

わたしに実行力と心がまえあらしめてください。

あなたの求めを敢行することを教えてください。

あなたのみわざを全的に偉大になしてください。

ただ信仰にあつてのみ担い得ます、

こんなにも美しく重い運命（天命）は。」

ヒルティさんから私はそういうように諭^{さと}されているように感じて読んだわけです。

●聖霊の力ある愛で突破

皆さんとこのような集会ができるようになった過去の、この信仰の導きにおけるところの思い出——私はただ自分の至らなさにかかわらず——本当に感謝しております。我々のこの交わりが、キリスト一点張りで、お互いにあるあなた方一人びとりの、我々お互いの一人びとりの中に生きて居給うところのキリストを中心にして交わっていく。その人らしさをそこにこのキリストが顕してくださる。これを信じぬき、望みぬき、荷いぬき、助けぬいて行きたいと、こう思っているわけです、本当の「フロイントシャフト」友情というものは。

すべての問題は、私は今度「宗教と教育」〔著作集第1巻『無者キリスト』／無的実存／第六章「宗教と教育」〕（1973年度、独協中学・高等学校『研究紀要』創刊号）に掲載」という、あるひとつの論文を書きます。特に教育の問題を、



「今はもう日本は教育者が宗教心をもたなかったら本当の教育はできない」ということをはつきり言うつもりです。教育者にかぎらず誰でもが、本当の教育というのは結局、「自己教育」なんです。ヒルティに言わせると、

「ゼルプスエアツィーウング」(Selbsterziehung)

というやつですが、自己教育をしていない人は本当の教育はまたできないわけです。まあ「教育」という言葉自身があまり好きな言葉ではないけれども。

我々の集会のあなた方一人ひとり、社会においてどういう場におきましても、その後輩に対しては本当の身をもって証人^{あかしびと}、身をもってする証人が本当の教育者なんです。言葉で語るものではない。そういった意味において、大いに今お互いに責任重大であるので、一人のひとが本当に一人の本ものをつくっていけば――それでは本当は増えないけれども――しかし、本ものを一人、二人つくっていくことが一生涯の仕事でいいんですよ。結局、魂から魂へ伝わっていく。これが本当の伝道で、いろいろきつかけはある。きつかけはあるでしょうけれども、やはり存在が存在を見出していく。これは御霊のひとが本当にそのことができる。

先程、野中君が『福音の心臓』〔曠愛新書第1号〕のところを読んでくださって、私は非常にありがたく思いました。結局、みたまの愛です。この「聖霊の愛」ということは手島君が言ったが、これは本当にいいポイントを突きました。この聖霊の愛が一切の秘訣なんです。どうぞ、その御霊の愛は、御霊は力ある愛ですから、いい加減な愛ではないんだから、どんなことがあっても必ず勝つんです。必ず相手を救いあげてしまう。現実にはどれほど救われなくみえても、本当の救い上げはこれだけがやる。どんなに誤解されようが、どんなに迫害されようが、一向大丈夫です。絶対にうろたえないし、そういうことに遭えば遭うほど、いよいよキリストと共にこの聖霊の力ある愛でもって突破していく。いかなる問題も一つも例外はない。人の心の魂の、人間の生活の上において聖霊の愛だけが本当に勝っていく。このことをあなた方はこれからいろんなことにお遭いなるでしょうけれども、

「心安かれ、我なり、^{おそ}懼るな」

と。この「我なり」はキリストが私たちの中で仰ってください。我らの中で御霊のキリストが仰ってください。

●無能即全能という秘訣

私もこの五人の、こないだもちよつと書きましたが、ちょうど北十字の白鳥座、あれは五つの星から出来ていますが、北十字星のように私は天界の五人を覚えざるを得ない。これからの責任は重大であると思う。これから何をするかの約束は、空手形になりますから、言わない方がいい。けれども、この『無者』〔著作集第1巻『無者キリスト』1975年9月刊〕は必ず出るでしょう。



まあ第7号「曠愛新書」も必ずそのうちに書きます。奥田君の奥さんが一生懸命にあのピリピ書の講筵を今文字にしていってくれる。私はもう恐縮しているけれども。〔註：『曠愛新書』第7号「一切の秘訣」(ピリピ書)は結局未刊〕

20世紀の日本のこれからの現実はいろいろ危機的なものをもっていると思います。であればあるほど、終末的なことでありますので、我々はこの御霊の結束をもつて進んでいく。また、

「弱き者は一人あるときに最も強し」

と、逆なことを私は言う。パウロは、

「弱き者は強し」

と言ったけれども。本当にキリスト自身が弱さに徹したんだからね。イエスは、

「自分は何もできない」

と言っているんだから。何もできない無能者なんだ。それが全能者だ。無能即全能、この秘訣は、このイエス・キリスト自身が身をもってお現しになった。私たちはもちろんキリストをそのまま真似なんかできっこないけれども、しかし、質的にはその御霊の完全性がやってきましたから。それでもつて乗り切ってください。でありますので、非常にもう勝利、希望です。希望は決して失望に終わらない希望。凱旋するところのもの。非常に盛んなものです。御霊はそれだけのものです、現実には。

私は過去のいろいろなことを雑然と物語りましたけれども、これは本当に今、ヒルティの詩のように、私のこのダメさ加減にかかわらず、あるいは、であればこそ神さまは選んだ。コリント前書1章に書いてある通り、弱き者、無きが如き者、卑しき者、貧しき者、そういうものを選んで、神さまは神の国を立てていく。皆さんは、

「どうも神さまは、私には天分が少なくて」

なんて、絶対にそんなことはない。少なければ少ないほどよろしい。

まあ獨協の生徒もね、私のそういう気持をとって、憤然として立ち上がってくれるといいんだけれども、どうも呑気なのが多くて困る。

●七十路の峠を越して

これからなんです、70歳になって。だから私は、本当は今日はお祝いでも何でもありません。皆さんとただ――詩篇90篇の終わりの方に「楽しむ」ということが非常に書いてあったね、「楽しませたまえ」と――楽しみを与え、キリストを楽しむ。キリストの霊がくれば、これほど楽しいことはない。我々はその「エピキュリアン(epicurean)」、快樂説。これはキリストの霊において楽しみ飲むご連中です。

手島君のところの連中は本当にその点はいいいね。彼らが写真を撮ると、みんな笑っている。みんなニコニコした写真。澄ました写真はひとつもない、見ていると。あれは決し



て不自然ではない。彼らは本当にそうなんです。その点はそこらのと正直ちがうですよ。『全部いい』なんては、私は言いはしませんけれども。とにかく、見ていてわかるんです。善きものは善しとして虚心坦懐に私は受けとります。まあ女の人みんな幕屋まげみたいなのをやっているが、ああいうことはあまり感心しないよ。

これから七十路ななそじの峠を越して、そして最後の峠にきたら、これからはもう天界へ行くわけだ。まあそんなわけで、私はこれから大いに山を登ろうと思っている。ちよつと遅まきだけれども。あなた方は20代でもつてこの信仰に入ったら、もつたいたくしょうがない、贅沢すぎるよ(笑)。だからシツカリしてください。私は50くらいになってやつと目が覚めたようなものだ。遅まきだけれども、これからやりますよ。これからも大いに勉強しなければいかんし。

それで、何が出来るか知りませんが、とにかく私は死に至るまでこの福音のためにいきます。私はいわゆる伝道者ではない。だから、集会はこの寺小屋式で結構なんだ。だけれども、あなた方は、

「この人は助けてやりたいな」

と思つたら、いくらでも連れてきなさいよ。一向差し支えないから。むしろそれくらになるのが、あるいは自然なんです。人助けをしようと思わなかったら、本当に救われているわけではない。自分でもつてたいたい気になつていたのでは。もつたいたいですよ、正直。「ハレルヤ」誌も、どしどしばらまいてくださいよ。たいたい加減にばらまくという意味ではない。奥田君のところから――こないだちよつと印刷ミスで「頁順が」1、3、2頁になつて

いるでしょ――

「引つくり返つたので一向差し支えないから送つてください、私の方で伝道に使い

ますから」

と、奥田先生から言つてきました。奥田君の気合はいいです、非常に。どうぞ皆さんも――お金は要らないですから、あの頁が引つくり返つたのは――ご自由にお使いください。

まあいくつになつても私は、

「これからだ、これからだ」

なんて言っているね。とうとうお終いに「これからだ、これからだ」が、

「これから天国へいきます」

なんてなことになるか何か知らんけれども。とにかくそういうことで、いつも私は前向きに進んで行きますから。本当は学校なんかやつていたらいけないんだが、ちよつと学校の責任もあるものですから。

●曠野の旅を楽しく勇ましく進んで行きたい

問題は今の自分の状況がどうかであるかとか何とかという、環境ではない。どういう環境



にあっても、

「時間が少ないの多いの」

ではない。とにかくそこを最善に生きていく。

「もう少し状況が変わったら、こういうことをします」

と言う人は結局しないわけなんだ。状況が悪いところでも突き抜けて行くという人が本当の仕事をするわけです。そういうことで、私なんかは大いに自分を引っぱたいていかなければならないと思っています。

どうぞ、このガリラヤのご連中を先頭にして、ヨルダンの人たちも曠野の旅を楽しく勇ましく進んで行きたいと思っています。

これが誠に雑然としていますが、一応私の思い出話を兼ねた恩寵の跡と、現在及び未来に向かつての自分の気持です。

聖書一卷がどれくらいもの凄いものであるかということが段々わかってきた。特に福音書――まあ新約聖書は全部と言ってもいいですけど――福音書がやっぱり一番。それから使徒行伝。使徒行伝のこの使徒たち。これが一番私たちの実存には、質的には非常に大事な内容を持っています。

それから旧約では、詩篇もちろんいいんだけど、御霊がきたら、詩篇はちょっともの足りないところがあるんだよね。だから、詩篇を聖霊の光でもって読まない。やっぱり旧約的な制限が相当ありますから。むしろ、預言者です。預言者の中でも特にイザヤ書だね。イザヤ書は繰り返し読んでください。これは本当に高次な世界です。それから、創世記というのはなかなか味がある。

皆さんは、もう私は聞かなくても、前進しつつあるということを私は本当にうれしく思っています。いろんなことにぶつかって、へこたれないで、非常にヨルダンの諸君もだいぶ鍛えられてきたことを思う。

そういうことですから、いよいよ希望より希望へと、恵みより恵みへ、力より力へ、信仰より信仰へ、讃美より讃美へと、進んで行きましょう。そして、せつかくのこれだけの福音をいただいて、どうぞ、積極的に人を、言葉の一番深い意味において、助けていく、導いていくということを地道にやってください。そうすると、そういうことをすればするほど、自分に力が与えられてくるんです。力が出てくるし、力が与えられる。温存していたらダメですよ。お願いいたします。男の方も女の方もそうです。では、終わります。

